

---

# IS いちか君と一夏のIS学園生活

迷い人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS いちか君と一夏のIS学園生活

### 【Nコード】

N7769Y

### 【作者名】

迷い人

### 【あらすじ】

初めてISを機動させた時、原因は解らないが子供の姿になった一夏。ただISを機動させると本来の姿に戻る。子供の一夏…大人の一夏…。この一夏の状態の魅力に色々と振り回されるIS女性陣。波乱万丈の一夏のIS学園での生活が始まる。皆さんの作品を読んでいたら自分も書いてみたくなり挑戦してみました。未熟者ですがよろしく願いします。

## いちわめ

『IS』…正式名称『インフィニット・ストラトス』

宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。しかしこのスーツは致命的な欠陥があった。『IS』は女性以外は使う事が出来ない。だが例外が出た。一人の男性が『IS』を動かしたのだ。その例外な存在、『世界で唯一ISを使える男』になった男性の名前は織斑一夏。彼自身それを望んだ訳ではないだろうが出来てしまった以上『IS』と関わった生活を余儀なくされるだろう。その点は彼も『IS』を動かした時点で覚悟は出来ていたかもしれない。だが予想外の事が彼の身に起きた。恐らく誰も予想しなかったことだろう。それは…

「全員揃ってますね！それじゃあSHRをはじめますよ」

黒板の前で微笑む女性副担任こと山田真耶先生。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……………」

誰からも反応はない。教室の中は緊張感…ではなく疑問を感じてい

る女生徒ばかりだろう。真耶と、当の本人、以外は。

「そ、それじゃあ自己紹介を始めましょうか」

何とか場を和ませようとする真耶。妙な空気のまま自己紹介が始まった。順調に自己紹介が進んで行き遂にクラスの生徒達が疑問に思っている者の順番だ。

「え〜と、次は織斑一夏君」

「はい」

呼ばれた青年：いや、幼く可愛らしい男の子が教壇に向けて歩き始めた。年齢的に見て五歳か六歳くらいでIS学園の制服を着ていて半ズボンだ。

「織斑一夏です。よろしくおねがいします!」

一夏は頭をペコッと下げて礼をした。

「はい。上手に自己紹介が出来ましたね」

真耶は一夏の頭を撫でた。

「へへ…」

やや顔を赤くしながら照れた表情をしている一夏。二人は和やかな空間を作っているがクラスの女生徒達は困惑していた。一同こう思っているはず。何でここに子供がいる。と。そんな疑問を余所に二人が和んでいるとパアッ！と教室に音が響いた。そして真耶が頭を抱えて苦しんでいた。

「山田先生。生徒たちの前で何をなさってるの？」

すらりとした長身、過肉厚ではないボディライン。狼を思わせる鋭い吊り目。黒いスーツを着た女性が出席簿を持って真耶の背後にいた。先ほどの音は出席簿で叩いた音だろう。

「あつ、千冬お姉ちゃん！」

笑顔で千冬の元に行く一夏。

「自己紹介は出来たか？」

「うん！」

笑顔で頷く一夏。そんな一夏の頭を撫でる織斑千冬。若干、顔が緩んでいるように見えるのは気のせいか？千冬の人気は凄いもので、女生徒達が騒いでも不思議ではないのだが今は状況に付いて行けず啞然としていた。

「お、織斑先生。何で叩いたんですか？い、痛いです…」

涙を流しながら千冬に訴える真耶。

「生徒たちの前で惚気ているからです」

そう言いながら小さい一夏の頭を撫でながら緩んだ顔している千冬。

「すみません…（今の織斑君を見ると母性本能が撥られるですよね〜）」

そんなやり取りを千冬と真耶がしていると女生徒の一人が遂に質問をした。

「あ、あの〜先生方。聞きたい事があるんですが…」

「んっ？何だ言ってみろ」

「その…そちらのお子さんは一体…」

恐る恐る質問しながら一夏を指をさす女生徒。

「この子か？自己紹介したのだろうか？この子は織斑一夏。私の弟だ」

「えっ…？あの子って千冬様の弟…？」

「それじゃあ、世界で唯一男で『IS』を使えるっていつ？」

「でも、年齢は私達と同じって聞いたけど…」

女生徒達がざわめく。

「君達もニュース等で知っているとと思うが、この子は『世界で唯一ISを使える男』だ。ISを使える以上ここ、IS学園に入学をさせた」

「それはわかるんですが…」

女生徒達が一夏をチラチラと見る。

「君達の疑問はわかる。同年齢と聞いていたのにここにいるのは小さな子供だ。不思議に思うだろう」

女生徒達は一同に頷く。

「男なのにISを使えるためかどうかは原因不明だが、初めてISを起動させた後：そのまま体が子供になった。それに体だけでなく精神面まで子供になってな…」

「そ、そんな事があるの？」

「さ、さあ？」

女生徒達もISを使って体に異常が出るなど考えてもなかったせいか同様している。



「君達がISを使っても体に異常は出ない。この子が特例なだけだ」

「でもその…子供の状態で授業なんて受けられるんですか？」

女生徒の一人が質問する。

「ISを機動させれば本来の姿に戻る。それに子供の姿での記憶も本来の姿に戻れば反映される。頭は悪くはないから学科の方は大丈夫だろ。ダメな時は別に方法を考える」

「はあ…」と言いながら女生徒たちは頷く。

「君達は何も気にせずに訓練に勤しむように。この子が気になって訓練に集中出来なかったという言い訳は聞かん。いいな」

「まあ、千冬様がそう言うなら…」

生徒達は簡単に納得していく。いいのだろうか？

「それにあの織斑君を見ていると何か…」

「うん。母性本能を操られるというか…」

「半ズボン…」

女生徒達は小さくなった一夏を見て、顔を赤くする者、鼻息が荒くなる者、何故か手をワキワキする者など様々だ。などと話をしているとチャイムが鳴った。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはISの知識を覚えてもらう。その後の実習だが、半月で体に染み込ませる。よかるうがよくなかるうが返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

「はーい！」

子供になった一夏は自分が問題の中心になっているとは露知らず手を上げて元気に返事をする。そんな一夏を見た、教室にいる女性陣は…顔が緩んでいた。

一時間目のIS基礎理論授業が終わり今は休み時間。教室は異様なオーラに包まれていた。『世界で唯一ISを使える男』を見ようと廊下には他のクラスの女子、二、三年生の先輩達が詰めかけている。一夏を見に来た女生徒達はまさか一夏が『可愛い男の子』だとは思わなかったらしく驚いていたが、直ぐに可愛いから気にしないと言う事になり一夏を見ながら…個々に様々な反応をしていた。女生徒達は一夏に話しかけようとしているが互いに抜け駆けをしよ

うと思っっているためか、相手の出方を気にしていて膠着状態になっていた。

「…ちよつといいか」

この膠着状態を崩し一夏に話しかける女子がいた。髪型はポニーテール肩下まである黒い髪。身長は女子の平均的なものだろう。一夏は少し首を傾げて声をかけてきた女子を見ていると。

「あつ！ 箒お姉ちゃん」

一夏は笑顔になり箒と呼ばれた女子の足にくっ付いた。その時、室内なのに箒に落雷が落ちたように見えた。

「あつ、あゝ一夏。と、取りあえず放してくれ…（か、可愛い。抱きしめたい…い、いかん！ 冷静になれ！ この子は一夏なんだ。あの…私の…だが！ ああ、考えが纏まらない）」

顔を赤らめながら必死に緩む顔を我慢している箒

「箒お姉ちゃん〜」

小動物のように箒に懐き、子供特有の無邪気で無垢な笑顔で箒を見上げる一夏。再び箒に落雷が落ちたように見えた。

「か、可愛い！」

限界を超えたらしく箒はよだれを垂らしおもいきり一夏を抱きしめた。いつもの吊りあがった目尻とは違い目は逝っていた。鼻息も荒いようだ。

「ぐえっ！」

箒に力いっぱい抱きしめられ苦しむ一夏。箒の力が強すぎるためか一夏は苦しんでいた。

「あーっ！ズルい！」

「私も抱きしめたい！」

「次は私が！」

「私は別のことを……」

自分も一夏を抱きしめたいと女生徒達が言いだす。今の一夏の状態を心配してくれる人はいないようだ。

「ええい！一夏は今、私との時間を過ごしているんだ。邪魔をするな」

箒が吠える。しかし他の女生徒達も負けてはいない。ギャーギャーと言いつつ合っている。そうしているところ…

「うるさいぞバカ共が！」

いつの間にか教室にきた千冬が一喝する。

「さっさと席に着け。授業をはじめろ」

しづしづ席に着きはじめる生徒達。ただ生徒達は口々に…

「次は私が織斑君を…」等と言っていた。

ふう…と息をつく箒。

(何とか一夏を守る事が出来た。この最高の癒しを！、ではなくて一夏の事に関しては他の誰にも譲りたくはない。一夏は…私の…)

「…はっ！」

(わ、私は、な、何を考えているんだ)

緩んだ顔ではなく、恋する乙女の顔から先刻までの吊りあがった目尻に戻る。

「さ、さあ一夏。授業が始まる。席に戻るぞ」

一夏に声をかけるが反応が無い。無反応の一夏を見ていると口から魂らしきものを出していた。

「い、一夏！一夏！どうしたんだ一夏！」

自分のバカ力…もとい自分のハグが原因で一夏が意識を失っているとは露知らず一夏に呼びかける筈。

「何をして…って一夏！しっかりしろ！保健室…いや、病院、いや、

ブラックジャックを…いや…」

混乱する千冬。いつもの威厳が全くない。

「きゃー織斑君！」

「しっかりして！」

「今、人工呼吸を！」

「それは私が！」

女生徒達も騒ぎ出す。世界で唯一ISを使える男だからか、それとも…とにかく騒ぎの中心にいるのは一夏のようだ。こんな感じで小さくなった一夏のIS学園での生活が始まった。

## いちわめく（後書き）

自分の考えた事を文章にするのは難しいですね。更新に時間がかかりそうです。ここに訪れたくれたみなさん。駄文ですがよろしくお願ひします。



だいにわめく（前書き）

いきなり4100アクセスもあるなんて驚きました。ISの人気の  
凄さを実感しました。訪れたみなさんありがとうございます。

子供の時の一夏は平仮名でいちか君と書きたいと思います。大人の  
時との状態を分かりやすくしたいので。

それと今回は短めです。すいません。

だいにわめ、

「ちょっと、よろしくて？」

「？」

物語が始まった早々、いちか君に声をかけてきた相手が出た。話しかけてきた相手は、地毛の金髪が鮮やかな女子だった。白人特有の透き通ったブルーの瞳が、ややつり上がった状態でいちか君を見ている。わずかにロールがかった髪はいかにも高貴なオーラを出している。その女子の雰囲気も『いかにも』今の女子という感じだった。今の世の中、ISのせいで女子はかなり優遇されている。優遇どころか、もはやいきすぎで女々しい構図になっている。そうになると男の立場は完全に奴隷、労働力だ。今では町ですれ違っただけの女性にパシリをやらされる男の姿なんて珍しくない。そういう時代の女子がいちか君の目の前にいた。

「訊いてます？お返事は？」

「あ、はい。はじめまして、織斑いちかです」

ぺこっとお辞儀をして挨拶をするいちか君。

「これはご丁寧に。私はセシリア・オルコットですわ」

セシリアもお辞儀をして挨拶をした。

「って、そうではなくて。相手が子供だと、どうも調子が狂いますわね」

こめかみに手を人差し指で押さえながら、ふうとため息をだすセシリア。

「あの、セシリアお姉ちゃんは僕に何か御用ですか？」

首を傾げながらセシリアを見るいちか君。

「そ、そうでした」

コホンと咳払いをするセシリア。

「挨拶をしようと思いましたが、でも世界で唯一男でISを操縦できると聞いてましたから、少しは知的を感じさせるかと思ってました。がこんな子供だったとは。期待はずれですわね」

「すみません…」

やや涙目で謝るいちか君。

「ふん。まあでも、わたくしは優秀ですから、あなたのような子でも優しくしてあげますわよ。ひっ！」

クラスの女子達が殺気が籠った目でセシリアを見ていた。とくに篝の眼光は凄まじかった。篝や女子達がセシリアを睨むのは、可愛いいちか君を苛めている、と捉えられているからだろう。

「（な、なんでしょう。このアウエー感は何？）」

教室の空気にたじろぐセシリア。

「と、とにかくそういう事ですから覚えてくださいまし」

そう言って自分の席に戻るセシリア。

「だ、大丈夫かいちか？」

そう言って箒がいちか君に話かける。

「う、うん」

まだ涙目で頷くいちか君。

「いちか。男の子が人前で涙を見せるものではない」

「う、うん！」

涙を拭いて笑顔でこたえるいちか君。

「よし」

そんないちか君の頭を撫でる箒。

「（セシリア・オルコット。可愛いいちかを泣かせるなんて、斬らねばならないな。それにしても涙目だったいちか。あれはあれでいい…）」

顔が緩み目が逝ってしまった筈。そんな筈を見ていちか君は…

「筈お姉ちゃん怖い…」

怯えていた。

三時間目の授業は千冬が教壇に立っていた。

「さて、再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな」

「代表者てなんですか？」

いちか君が千冬に質問する。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席…まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点ではたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。

「はい。織斑君を推薦します！」

女子の一人が手を上げて言った。

「私もそれが良いと思います」

他の女子も同じ意見のようだ。

「他にいないのか？だったら無投票当選だぞ」

「待ってください。納得がいきませんわ！」

バンツと机を叩いて立ち上がったのはセシリアだった。

「そのような選出は認められません！大体、こんな子供にクラス代表者を任せて良いと本気で思ってますの？」

『うっ！』と女子達は唸る。子供にクラス代表者を任せる事がマズイと思っているようだ。

「いいですか。クラス代表者は実力トップがなるべき、そしてそれは私ですわ！」

ドンドンとヒートアップするセシリア。

「それにこんな子供がISを使って戦闘をするなんて出来ると思いまして」

「出来るぞ」

「えっ？」

千冬が言葉を挟んだ。

「最初に言わなかったか？この子はISを機動させれば本来の姿に戻る。そのあたりに関しては問題はない」

「だ、だったら決闘をしましょう。勝った方がクラス代表者になると言う事で」

「だそうだが、いちかは良いか？」



可愛らしい顔とは違いやや大人っぽく、どこか逞しさを感じる顔で。

「うん！わかった。僕、戦うよ」

宣言するいちか君。

「織斑君。止めた方がいいよ。セシリアはイギリスの代表候補生だよ」

女子の一人が止めてくる。

「代表候補生って何ですか？」

「国家代表IS操縦者のことだよ。まあ、ISのエリートってところかな。だから実力も相当なものはずだよ」

「でも千冬お姉ちゃんが、男が一度言った事は変えちゃダメって言うってたから」

と先ほどの顔で止めてきた女子の方を見る。

「はづー！」

その女子は顔が真っ赤になり。

「先っきまでの可愛い顔とは違った良さが……」

「？」

「話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意をしておくように（先っきの顔を写メで撮りたかった……）」

ぱんつと手を打って千冬が話を締める。そして授業が始まった。ただ女子達は授業に集中出来てなかった。先ほどのいちか君のギャップに一同、萌えていた。そして毎度のことながら箒は顔が緩み涎をたらし。

「あの顔は反則だ……でも……良い……」

そんな箒を見ていちか君は……

「篝お姉ちゃん。やっぱり怖い……」

また怯えていた。

だいにわめく（後書き）

次回はセシリアとのバトルまで行きたいですね。そうしないと大人の時の一夏の出番が無いので。

次回もがんばりますのでよろしくお願いします。

だいさんわめ〜(前書き)

セシリアとのバトルまで話を続けるつもりが手前で終わってしまっ  
た。これも文才のなさでしょうか？

みなさんが楽しんでくれれば幸いです。では！

だいさんわめ〜

いきなりだがここIS学園は全寮制なのだ。生徒はすべて寮で生活を送る事が義務づけられている。これは将来有望なIS操縦者達を保護するという目的があるらしい。確かに、未来の国防が関わっているとなると、学生のころからあれこれと勧誘しようとする国がいてもおかしくはない。実際どこの国も優秀な操縦者の勧誘に必死だ。特にこの物語の主人公こと織斑いちか君は、今まで前例のない『男のIS操縦者』だから、各国の大使だの遣伝子工学研究所の人間など色々な連中が来るだろう。そんな連中からいちか君を守るために寮に入るのも当然といえる。そして今、いちか君は副担任の山田真耶と手を繋いでいちか君の部屋に向かっている。

「それでね…」

「そうですか…」

笑顔で一日の出来事を話すいちか君。それを笑顔で応える真耶。中睦まじい姉弟に見える。真耶が千冬以上に姉に見えるのは気のせいかな？ちなみにいちか君の着替えなど日用品は千冬が用意した。恐らく大金を使い特注の物ばかり用意したと思われる。

「え・と、ここですね。1025号室は」

真耶は部屋番号を確認してドアを開けた。

「はい。今日からここが織斑君のお部屋になりますよ」

部屋の中は、まず目に入るのは大きめのベッド。それが二つ並んでいる。恐らくそこいらのビジネスホテルのよりいい代物だろう。いちか君がベットの上で飛び跳ねていると。

「誰かいるのか？」

奥の方から声が聞こえてきた。ドア越しなんだろう、声に独特の曇りがある。部屋にシャワー室があるのでそこにいるのだろう。

「ああ、同室になった者が。これから一年よろしく頼むぞ」

部屋にあるシャワー室から出てきたのは今日再会を果たした幼なじみだった。相手が女子だと思ってそのままの恰好で出てきたのか、箒はその体にバスタオル一枚を巻いただけの姿だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

きよとんとした顔の箒。

「い、い、いちか・・・？山田先生？」

「あつ、篝お姉ちゃん」

「こんなタイミングで来てすいません、篠ノ之さん」

「あ、いえ、お構いなく、ではなくて・・・」

状況について行けず混乱する篝。

「何故、いちかと山田先生がここに？」

「えつとですね、織斑君もこの部屋で生活する事になります。つまり篠ノ之さんのルームメイトは織斑君です」

「へ？」

なびりに混乱する篝。



「本当は年頃の男女が同じ部屋と言うのは良くないですけど、今の織斑君の状態で一人にするのは色々と不安なので」

「はあ…」

「織斑先生との相部屋も考えられたんですけど、教師と生徒が同じ部屋というのも良くないですから。そんな時、篠ノ之さんが織斑君と幼なじみだと聞いたので、良くはないですが織斑君の事を任せようという事になりました」

「そんないいかげんな…」

「篠ノ之さんも急にこんな事を言われて困るでしょうけど、そこを何とかお願いしたいんです」

頭を下げる真耶。

「う、んー」

悩む筈。さすがに子供の姿だといえ、好きな異性と相部屋というのは悩むようだ。そんな時…

「箒お姉ちゃん……」

箒の手を握り切なげな顔で箒を見上げるいちか君。本日二回目の落雷が箒に落ちた。

「はい、問題はありません。任せてください！」

一瞬にして決断する箒。

「ありがとうございます。ではお願いしますね」

そう言っって部屋から出て行く真耶。

「それから篠ノ之さん。何時までもその格好だと風邪を引きますよ」

そう言っって部屋から出て行った。

「//////////」

今の自分の恰好を見て赤くなる箒。

「い、いちか。ちょっと待っていてくれ。服を着てくる」

急いで服を着る筈だった。服を着た後、お互いベットに座りこの部屋での線引きについて話そうとしたが…

「……………」

子供の体の為かいちか君はおねむの様だ。うつらうつらとしている。

「仕方がない、もう眠るぞ。いちか」

「…ん」

意識が朦朧としているのか、返事もはっきりせずそのまま眠ってしまった。

「仕方がない奴だ」

いちかに布団をかける筈。

「さて、私も眠るかな…」

ここまでは普通だったが何故か、いちか君と一緒にのベッドで眠る  
筈。

「（一夏と同じ部屋というのはその…色々とな…あるが、嬉しくもあるな）」

筈の表情は照れたような、恋する乙女の表情のようだ。

「（それに小さいいちかとの生活というのも…イイ！）」

先ほどの恋する乙女の表情とは違い、顔が緩み目が逝っていた。鼻息も荒い。

「う、うん。筈お姉ちゃん怖い…」

夢の中でも、逝った筈に怯えるいちか君だった。

とある別の部屋。そこに織斑千冬が椅子に座り携帯を使って誰かと話をしていた。

「で、一夏が何故幼児化したのかわかったのか？」

「んゝさすがに東さんでも、直ぐには分からないですな。情報が少な過ぎるからねゝ。いつくんを私に預けてくれれば直ぐにでも…」

電話の相手は篝の姉にしてISの製作者：篠ノ之束のようだ。

「却下だ」

「ちーちゃんはずれないね。東さんも小さいいつくとスキンシップをしたいよゝ」

「いちかが汚れる」

「酷いなゝ。まあ、ちーちゃんはいつくんLOVEだから仕方ないかな。わー待って待って、切らないで！」

千冬が電話を切ろうとしたのをわかったらしく止めにはいる。

「とにかく一夏の件、調べておけ」

「了解。あつ、それとちーちゃんに一言だけ言っておくことがあるんだ」

「何だ…」

「いつくんに色んな衣装を着せて、その…」

千冬は電話を切った。

「アイツは何を言っているんだ」

部屋に置かれている大量の衣装ケースを見ながら。

「そんなのは当たり前だろう」

いちか君にどの衣装を着せるか吟味を始める千冬。この人は本当に伝説のIS操縦者と言われた人なのだろうか？

翌日朝の八時。食堂でいちか君と篤は朝食を食べていた。ちなみにメニューは和食セットだ。

「ねえねえ、あの子が噂の子だった〜」

「何でも千冬様の弟らしいわよ」

「小さい手でがんばって箸使っている姿。可愛い…」

いちか君を珍しがるのは昨日から変わらないようだ。周りの女子が一定の距離を保ちつつも、『興味津津ですよ。でもがつつきませんよ。そして萌えてます』という状況だった。

「お、織斑君、隣いいかな？」

「はい？」

声が出た方を見ると朝食のトレーを持った女子が三名、いちか君の反応を待ちわびる如くたっていた。

「はい。どつぞ」

声をかけてきた女子は安堵のため息を漏らし、後ろの二人は小さくガツポーズをしている。周囲からは何か妙なざわめきが聞こえた。

「あゝっ、私も早く声をかけておけば！」

「まだ、まだ二日目。焦る段階じゃないわ」

「そ、それよりいちか君の部屋って何処かわかった？」

「山田先生が案内してたっという情報しか…」

いちか君の部屋の情報はまだばれてないようだ。

「うわ、織斑君って朝すっごい食べるんだ」

「子供なのに」

「お姉さん達はそれだけしか食べないですか？」

「わ、私達は、ねえ？」

「う、うん。平気かな？」



「お菓子よく食べるし！」

等と話しているよ。

「いちか。私は先に行くぞ」

「あ、はい」

食事を済ませた篤は席を立って行ってしまふ。何か機嫌が悪そうに見えた。

「織斑君って、篠ノ之さんと仲がいいの？」

「はい。幼馴染ですから」

「そ、そうなんだ」

「それに同じ部屋です」

爆弾を投下するいちか君。その爆弾の威力はいか程のものか。

「「「「「「「「「「「「えっ！」「」「」「」「」「」「」

周囲は大いにどよめいた。

「き、聞いた？先っきの話」

「え、ええ。篠ノ之と同じ部屋って」

「急いで篠ノ之さんの部屋番号を調べて」

「いいな、私も織斑君と一緒に部屋になりたいな」

女子達の反応は様々だが威力は凄まじいようだ。

「うるさいぞ！食事は迅速に効率よく取れ！遅刻をしたらグラウンド  
十周させるぞ！」

千冬の声がよく通る。食堂にいた全員が慌てて朝食の続きに戻った。  
いちか君が急いで食べていると。

「いちか。ゆっくりでいいから、よく噛んで食べるんだぞ」

「うん。千冬お姉ちゃん」

微笑ましい姉弟のやり取り？そんな二人のやり取りを聞いていた女子達は『何か理不尽』と思っていた。

三時間目の授業の時、少し問題？が起きた。ISの授業をすれば必ず篠ノ之 束ゆづの名前が出てくる。そうなると妹である篤に話題が行く。そして姉の事を聞かれると大声を出して話を終わらせてしまった。そのせいか教室の空気がやや重いものになっていた。

「さて、授業を続けるぞ。と、そういえばいちか」

「はい。千冬お姉ちゃん」

「いちかのISだが準備まで時間がかかる」

「？」

「予備機がない。だから、少し待ってくれ。学園で専用機を用意させる。出来ないと言われてもさせる」

「それって政府からの支援が出てるって事」

「いいなあ…私も専用機欲しいなあ」

女子達がそれぞれ羨ましがる。

「話は終わりだ。さあ、授業をはじめろぞ」

女子達の話が終わらせ授業をはじめると冬だった。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

休み時間、早速いちか君の席にやってきたセシリアは、腰に手を当ててそう言った。

「はい。僕も安心しました」

笑顔で応えるいちか君。

「（やっぱり、調子が狂いますわ。それに…）」

セシリアも前回のアウェー感を味わいたくないのだろう矛先を箒に変えた。

「そういえばあなた、篠ノ之博士の妹なんですからね」

「妹というだけだ」

束の事を聞かれたせいか、鋭い視線ですごむ。

「（また、いちかを泣かせる気が…）」

束の事ではなかったようだ。

「ま、まあ。どちらにしてもこのクラスで代表にふさわしいのはわたくし、セシリア・オルコットであるということをお忘れなく」

ぱさっと髪を手で払ってきれいに回れ右、そのまま立ち去っていつ

た。この後、いちか君は箒と一緒に昼食をとった。子供なのに箒がクラスで浮かない様に気を使ったようだ。途中、三年生の女子に話かけられいちか君にISについて教えてくれようとしたが、箒が放つONE PIECEの覇王色の覇気に威圧され気を失った。箒には王の資質があるようだ。

「箒お姉ちゃん」

「なんだ。いちか」

「僕、ISを上手に動かせるようになりたいから、僕を鍛えてほしい」

「急だな。しかしだな…（小さいいちかを鍛えて本来の姿に戻った時に鍛えた効果があるのだろうか？そもそもこの可愛い、いちかに敵しくするなんて出来るだろうか…）」

「箒おねえちゃん。お願い」

いちか君スマイルが炸裂した。

「よし、わかった。今日の放課後、剣道場で」

威力は絶大で悩む筈を一撃で陥落した。

「（よく考えれば、いちかとの二人の時間が増えることになるな。これはこれで良いか。放課後、いちかと二人きり…）」

顔が緩み鼻息も荒くなる筈。

「この時の、筈お姉ちゃん怖い…」

この時の筈に怯えるのは定番化してきているようだ。

いちか君との特訓の後、道場で着替える筈。

「（小さくなくても体が剣道の事を覚えているのか、素振りをさせても技術がしつかりとしていたな）」

いちか君との特訓を思い出す筈。体が子供のなので厳しい鍛練をするわけにはいかないので素振りなど基礎的な事をした。

「（しかし、小さいいちかが素振りをしてる姿を見ていると昔を思い出すな）」

思い出に浸る筈だった。

「小さいちかも良いが、大きくなった一夏とも会いたいな。まだニュースで流れた写真でしか見た事がない。テレビで出た一夏は、その、まあ、格好いいと思う。そして…」

頭に巻いた手ぬぐいをほどき、髪に触れる。長く伸びたそれは、後ろでくくつてもまだ腰近くまで届くほどだ。

「（よく私だとわかったものだ…）」

六年もの時間が過ぎて一夏自身、体に異常が起きているのに直ぐに筈だとわかってくれた。筈はそれが妙に嬉しかった。

「（髪型を変えなかった甲斐があったというものだ）」

些細な偶然にすぎるような、あるいは願掛けに期待するような、そんな甘い考えが多小なりともあった。筈も十五才の春を迎えた恋する少女である。

「（明日から放課後は特訓だ。いちかと二人きりになる口実が出来



た」

更衣室で一人、握り拳を作って気合をいれる筈だった。

そして翌週、月曜。セシリアとの対決の日。

「筈お姉ちゃん……」

「何だ、いちか」

「僕さ……」

「ん？」

「僕さ、剣道の訓練ばかりでISの訓練をしなかったけど、いいのかな」

「し、仕方がないだろう。お前のISがなかったかのだから」

「うん。そうなんだけど……」

いちか君専用のISはとやらは何かごたついていたらしく、結局来ていない。そう、今も来ていない。とその時…

「お、織斑君織斑君織斑君！」

第三アリーナ・Aピットに駆け足でやってきたのは山田先生だ。その後ろに千冬もいた。

「ついに来ました！織斑君の専用IS！」

「！」

「いちか。すぐに準備しろ。アリーナを使用できる時間は限られている。ぶつつけ本番でものにしろ」

「え？」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろ」

「え、え？」

「早く」

そう言われ、そのままピット搬入口まで連れて行かれるいちか君だった。そして搬入口の奥にあったのは…

そこには『白』がいた。

白。真っ白。飾り気のない、無の色。眩しい程の純白を纏ったISが、その装甲を解放して操縦者を待っていた。

「これが僕の…」

「はい！織斑君の専用IS『白式』です！」

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間が無いからフォーマットとフイッティングは実戦でやれ」

せかされて、いちか君は純白のISに触れる。

「あ…」

少しぼくとするいちか君。

「何をしている。背中を預けるように座る感じでいい」

「千冬お姉ちゃん……」

いちか君は千冬達の方を見て

「背が届かないし、体にあわない……」

「「「……」」」

三人とも絶句した。確かにそうだ。本来の姿は十五才でも今の姿は五・六才位の体なのだから。

「ど、どうしましょう。お、織斑先生！」

慌てる真耶。

「む……」

サイズの事を忘れていたのか珍しく言葉に詰まる千冬。

「…」

箒はただ啞然としていた。三人が慌てている時、いちか君は『白式』にまた触れた。それと同時に光がいちか君を包み込みそして！

ISを装着した一夏がいた。

「い、一夏、一夏なのか…」

恐る恐る質問する箒。

「ああ、久しぶりだな箒」

笑顔で応える一夏。

「／／／／／／／／／／／／／／／／」

やっと本来の姿になった幼馴染は男らしい顔だちになっていた。生意気だけだった瞳は、わずかだが大人の男を感じさせるものに変わっていた。そんな一夏の姿に見惚れる筈だった。

「えっと…その、な…小さくなった俺の面倒を色々と見てくれてありがとうかな…」

「あ、いや、そ、その、幼馴染なんだ。そんな事は気にするな」

「あ、ああ」

何でしょうこの空気は？

「そ、それとな筈」

「な、何だ？一夏」

「小さくなった俺の面倒を見てくれるのはありがたいけどな、その…一緒のベットに眠たりするのはちょっとな…。千冬姉が言っていたと思うけど、小さくなった時の俺の記憶は今の俺に反映されるわけでその…な」

赤くなりながら言う一夏。

「え・・・・・・・・・・はっ！○×　　¥」

真っ赤になった筈は全身から湯気をだしているように見えた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

互いに真っ赤になり沈黙する二人。だからこの空気は何だろう？そんな雰囲気壊す音がした。

パンツ！

「痛た！」

「これからISを使って戦うのに何をしているんだ？お前は」

凄く不機嫌そうな千冬が何故か持っている出席簿で一夏を叩いた。

「ち、千冬姉。俺IS装備しているのに何でこんなに痛いんだ？」

頭を押さえて千冬に質問する一夏。

「それは私の技があればこそだ」

「……………」

何と言う理由。しかし何故か納得できる理由。千冬の技はISのバリアーをも貫けるのか。

「時間が無いんだ。さっさと行って来い」

「わかったよ……」

ゲートに向かう一夏。

「第」

「な、何だ」



「行ってくる」

「あ…ああ。勝つていい」

その言葉に首肯で応えて、一夏はピット・ゲートに進む。遂に一夏の戦いがはじまる。

だいさんわめ〜(後書き)

今回は初の戦闘シーンです。原作以外の戦闘の表現をするつもりですが上手く表現できる自信はありません。  
とにかくがんばりますのでよろしく願います。

だいよんわめく(前書き)

更新が遅れました。すいません。

一夏が中途半端なチートになりました。支離滅裂な点もあると思いますがそこはスルーしてください。

だいよんわめ〜

アリーナの観客席に一夏のクラスメイトはこれから始まる試合を見るため集まっていた。

「いちか君にはがんばってもらいたいけど、相手が悪いよね」

「うん。イギリスの代表候補生だもんね…」

「いちか君が怪我をしなければいんだけど…」

「セシリアも子供相手なら手加減をしてくれるでしょう」

などと一夏が勝つとは誰も思っておらずいちか君が怪我などしないかの方が気になるようだ。

「あつ、ゲートが開くよ」

両方のゲートが開き始めた。そして片方のゲートから現れたのはセシリア。鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』。その外見は、特徴的なフィン・アーマー四枚背に従え、どこか王国騎士のような気高さを感じる。対するは…

「ね、ねえ。あの、いちか君って…」

「小さくないよね…。ということは千冬様が言っていた…」

「あれが本来のいちか君の、いや織斑一夏君の姿…」

「……………はぁ……………」

クラスの女子達は『白式』を纏った本来の一夏の姿に見惚れていた。

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアがふふんと鼻を鳴らす。腰に手を当てたポーズが様になっている。そしてセシリアの手には二メートルを超す巨大な銃器が握られていた。ISは元々宇宙空間での活動を前提に作られているので、原則空中に浮いている。そのため自分の背丈より大きな武器を扱うのは珍しくない。アリーナ・ステージの直径は二〇〇メートル。発射から目標到達までの予測時間は0・四秒。すでに試合開始の鐘は鳴っているので、いつ撃ってきてもおかしくはない。

「貴方のその姿を見て安心しましたわ」

「？」

「私、子供を痛ぶることなんて出来ませんの。そんな事をすればオ  
ルコット家の恥ですわ。その姿なら遠慮なくいけますから」

「そうかい……」

「貴方に最後のチャンスをおあげますわ」

腰に当てた手を一夏の方に、ぴつと人差し指を突きだした状態で向  
けた。左手の銃は、余裕なのかまだ銃口が下がったままだ。

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボ  
ロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといふなら、許し  
てあげないこともなくてよ」

そう言つて目を笑みに細める。警戒、敵IS操縦者の左目が射撃  
モードに移行。セーフティのロック解除を確認。ISが告げる情  
報を確認する一夏。

「そういうのはチャンスとは言わないな」

「そう？残念ですわ。それなら…」

警告！敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填

「お別れですわね！」

キュインッ！耳をつんざくような独特の音。それと同時に走った閃光が刹那、一夏の体を撃ち抜くはずだった。

「えっ！」

閃光はそのまま一夏をすり抜けていった。

「な…あ、あれを避けるなんて少しは出来るようでわね。でも結果は変わりませんわ。さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

射撃、射撃射撃射撃。まさに弾雨のごとき攻撃が一夏に降り注ぐ。しかも、それらすべてが的確に一夏を狙っている。普通なら凌ぐのですら難しい。しかし、その攻撃はすべて一夏をすり抜けていく。

「いったいどういう事なんですか？わたくしの射撃が当たらないなんて」

ピットでリアルタイムモニターを見ている篤、千冬、真耶。

「織斑先生。一夏を狙った射撃がすり抜けていくのは、ISの機能ですか？」

千冬に質問する篤。

「いや、あれは単に避けているだけだろう。射撃が当たる瞬間に高速でそれも紙一重で回避しているな。ただあまりの速さに回避しているように見えず、すり抜けているように見えるのだろう。あれならシールドエネルギーを殆ど使わなくていいだろうな。オルコットからしてみれば亡霊か何かと戦っている気分だろうな」

「織斑先生は一夏にそんな技を教えたのですか？」

「いや、何も。ISでの戦闘もこれが初めてのはずなんだが。正直、



私も驚いている」

「なるほど。反逆ルオーシユLOST COLROSSのラオと同じ技を使っているんですね。わかります！」

拳をグツ！と握りモニターを見る真耶。

「「何がわかったのだろうか？」」

千冬と筈は思った。

戦闘中の一夏とセシリア。セシリアは四つのビットも使い一夏に向けて射撃をするがまだ、一撃も当たってない。

「（あれだけ撃てばエネルギーを幾分か消費したはず…）」

そう思いながら『白式』のエネルギー残量を確認する一夏。

「（よし、こっちのエネルギーは大丈夫だ。そろそろ攻めるか。でも上手くいくか…）」

白式の展開可能な装備を調べる一夏。

「一個しかないのか…」

『近接ブレード』と書かれた装備しか表示されていない。

「やってみるか！」

一夏は近接ブレード《名称未設定》を呼び出し、展開する。キィイン…。高周波の音とともに、一夏の右腕から光の粒子が放出される。それは手の中で形となって、収まった。片刃のブレード、渡り一・六メートルはある長大な『刀』が一夏の武器。

「中距離射撃型のわたくしに近距離格闘装備で挑もうなんて…笑止ですわ！」

「そう言っけどまだ一発も当たってないぜ」

「お黙りなさい！」

すぐさまセシリアの射撃。しかし一夏をすり抜けていくだけだった。

「（くそ！一次移行も終えていないからか、『白式』の反応が鈍い。セシリアとの距離は二十七メートル。一気に距離を詰めたいがそれが出れない。無理に距離を詰めれば…避けることが出来ず直撃か）」

セシリアも焦っているが一夏も内心焦っていた。

「（でも、距離を詰めればこちらが優位だ。セシリアは自分でも中距離射撃型と。近接格闘の間合いで、あの長大なライフルが役に立つとは思えない。それに見えている限り近接用の装備はない。強引に攻めてみるか）」

一夏は一気に距離を詰めようとした。

「させませんわ！」

セシリアの射撃の勢いが増した。ビットからの射撃も凄いものだ。

「（行ける。後は集中するだけだ。篝との放課後の特訓が生きてきた。集中は、剣術の究極にして基礎だからな）」

段々距離を詰める一夏のスピードが上がってきた。

「（しかし、箒には感謝だな。特訓の事もだけど小さくなった俺の面倒を見てくれて。幼馴染というのもあるかもしれないが…）」

戦闘中に箒の事を考える一夏。

「（初日には箒に抱きついたっけ。いや、抱きしめられた？そして同じ部屋になって…）」

初日からの箒にとのやり取りを思い出す一夏。

「（箒に…もらったり、箒に…したり、箒と一緒に…たり、箒と、箒と、箒と、箒と、箒と…）」

段々と一夏の顔が赤面してきた。

「（うわあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああ！）」

両手で頭を抱える一夏。顔から湯気が見える？よつな気がする。

「（俺って何をしてるんだ！いくら子供の姿で精神も幼児化してい

てもあんな事やこんな事をするなんて！それに何か凄い事を言った  
ような気もする。やべ。俺、篝の顔を見れない」

さらに赤くなる一夏。白式が赤く見えてきた。某専用のMSのよう  
だ。

「隙ありですわ！」

「あっ…」

羞恥心で頭を抱えていた一夏をビットが取り囲んでいた。いつの間  
にかビットの数が六機に増えていた。しかもレーザー射撃タイプと  
は違うようだ。これは『ミサイル』だ。そして…

ドカアアアアアアンツ！

一夏は爆発と光に包まれた。

「一夏っ…！」

モニターを見ていた篝が思わず声を上げた。

「ふん…」

黒煙が晴れた時、千冬は鼻を鳴らした。けれどその顔には安堵の色がある。

「機体に救われたな、馬鹿者め（よかった。一夏は無事の様だ。もし一夏に何かあればオルコットの奴、退学だけではすみませんぞ）」

ブラコンで国家問題を起こしかねない千冬だった。と、それは置いてかすかに漂っていた煙が、弾けるように吹き飛ばされる。そしてその中心には、某専用…ではなく純白の白い機体があった。そう、真の姿で…

「フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください」

一夏の意識に直接データが送られてくる。と同時に、目の前に現れるウィンドウ。真中には『確認』と書かれたボタンがある。一夏はそのボタンを押した。そうするとさらに膨大なデータが流れて込んできた。いや、正確には整理されいるのだろう。そして変化は劇的に訪れた。

キイイイイイイイイン！

高周波な金属音。刹那、一夏の全身を包んでいる…いや、一夏の身  
そのもののISが光に粒子に弾けて消え、そして形を成す。

「これは…」

新しく形成されたIS装甲はまだうすぼんやりと光を放っている。  
そして先ほどより洗練された形へと変化していた。

「ま、まさか…一次移行？あ、あなた、今まで初期設定だけの機体  
で戦っていたって言うの」

そういう事だ。『最適化』が終わり、やっと白式は一夏専用になっ  
た。機体のデザインも変わったが、何より変わったのはその武器だ  
った。

『近接特化ブレード・《雪片式型》』

その名前はかつて千冬が振るっていた専用IS装備の名称。刀に型  
成した形名。それが雪片。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

「は？」

「守られるだけでなく、今度は俺が守らないとな」

「は？あなたは、何を言ってる…」

「私的な事だよ。でも今回は…」

「何の話を…ああもう、面倒ですわ」

「夏に向かってビットが飛んで行く。」

「（見える…）」

「夏は雪片式片を構えて。」

「セシリア・オルコット！」

「？」



「下手に動くなよ。まだ手加減が出来そうにない」

そういと雪片式型に光の粒子が集まり刀身が光輝いた。そして一夏は縦一閃に振り抜いた。そうすると刃先から超高密度のエネルギーを斬撃として放出されビットを斬り裂いた。

「なっ、何ですか?」

焦るセシリア。

モニターを見ている筈達。

「あ、あれはいったい何ですか?」

「ああ。あれは…」

「BLOACHの月牙〇衝ですね。わかります!」

両拳をグツ!と握りモニターを見る真耶。

「（だから何がわかったのだろうか？）」「

二人ともそう思うのだった。

そして一気に距離を詰めるためセシリアに突撃する。機体の瞬間速度、センサー解像度はさつきまでの比じゃないようだ。反応の鈍さなど微塵も感じない。そしてセシリアの懐に飛び込んだ一夏は、もう一度月〇天衝？のようなものを放つため全エネルギーを一気に集中した。

「きやあ」

セシリアは目を瞑り身構えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

が、その斬撃がセシリアに当たる事はなかった。なぜなら……

『試合終了。勝者…セシリア・オルコット』

「えっ……」

セシリアは何故勝ったのかわからず困惑していた。それはアリーナで観戦していたギャラリーもモニターを見ていた筈、真耶も同じだった。

「おめでとう。セシリア」

一夏は笑顔でセシリアを称えた。

「あいつ、わかっててやったな……」

千冬は「やれやれ」という顔をして意味あり気な事を言う。試合結果は……一夏の負け？のようだ。

## だいよんわめく(後書き)

次回からセシリアにもフラグが成立しますが、いちか君への対応をどのようにするか悩んでいます。可愛さに振り回されるのは考えてますが等とは違う対応を考えてます。ここまで読んでくれてありがとうございます。

## だいごわめゝ（前書き）

なんだかプライベートで忙しくなり、更新が遅れがちです。何とかがんばりますのでこれからもよろしくお願ひします。セシリアファンのみなさん、すいません。何かセシリアのキャラが変になりました。

だいごわめ〜

セシリアとの戦闘を終えてピットに帰る一夏。

「お待ちなさい！」

「ん？」

その一夏を呼び止めたセシリア。

「あなた、ワザと負けましたわね！」

激昂するセシリア。無理はないだろう侮蔑した相手に情けをかけたのだから。

「（ああ…やっぱりバレたか）」

戦闘中にシールドエネルギーも消費していないのに残量が0になるはずがない。

「最後の一太刀、全エネルギーを雪片式型に集中させて、そのまま

拡散した」

「何をしたなんて、どうでもいいですわ！わたくしが聞きたいのは何故ワザと負けたかですわ！」

「そこですか…」

自分の頬を人差し指でポリポリとかく一夏。

「返答によつては…」

セシリアは長大な銃器、《スターライトmk?》を構えた。

「理由は二つ。一つ目はクラス代表なんて俺はやりたくない。二つ目、これが一番の理由かな。小さい俺も同じ考えだ」

「それは、何ですの…」

「セシリアに認めてもらいたかったからかな」

「は？」

「今が女尊男卑社会だからかな。セシリアって男を下に見ているところがあるだろ。それと男を嫌っているようなところもあったかな」

「（男ではなく情けない男ですけど…）」

「俺が男だからって理由で俺の実力を測られなくなかった。それに嫌われたくなかった。だからまずは全力で戦って俺の実力を知ってもらいたかった」

「そして私より強い事を証明して、そしてワザと負けて情けをかけた侮蔑した私を嘲笑しようか？」

「そんな事はしない。さっき言ったろ？セシリアに認めてもらいたかったって」

「何を認めるというのですの」

「ISの技術を競い合い高め合う《ライバル》として、そしてこれからIS学園で同じ時間を過ごす《友達》としてさ…」

「はっ」



セシリアは何を言われたのか一瞬理解が出来なかった。

「（え、えつと、何て言いましたの？た、確かライバルと言ったよ  
うな…ま、まあそれは置いて、と、友達と言われたような…つ、つ  
まり、わ、私と、と、友達になりたいと？）」

動揺するセシリア。

「それにしても、セシリアはやっぱ強いな」

「はへ？（こ、今度は何ですの）」

変な返事をするセシリア。

「先っきの戦いは、セシリアの油断があったからあそこまで戦えた  
けど、それがなく、最初から本気で戦っていたら俺は負けていたな」

千冬なら油断する時点で駄目だと言いきそうだが。

「えっ？」

「イギリスの代表候補生ってのは伊達じゃないな」

「と、当然ですわ」

「やっぱり、代表候補生として背負っているものがあるからか？セシリアと戦っている最中に見つけたぜ。俺が背負うもの…守りたいものをさ。だから俺は強くなるぜ」

そう言って一夏はセシリアを見る。強い意志の宿った瞳で…

「……………」

セシリアはただそんな一夏に見惚れていた。

「そういえばこの姿で会うのは初めてだな。じゃあ遅いけど改めて自己紹介するな。俺は織斑一夏。小さい俺、共々よろしくな」

そう言って一夏は笑顔で右手を差し出した。

「…あ…い…」

何を言ったか聞こえないくらいの声で返事をして、おずおずと手を出して一夏と握手をするセシリア。

「よ、よろしくですわ…」

もはや、先ほどの激昂したセシリアの姿はなく、しおらしくなっていた。

「ん？」

白式が三人の生命反応を感知した。どうやら箒達のような。中々帰って来ないので様子を見に来てくれたのかもしれない。

「っ！」

一夏は小さい自分と箒とのやり取りをまた思い出し、真っ赤になった。

「（だ、ダメだ。今は箒の顔をまともに見えない。心が落ち着くまで一旦引こつ）」

一夏がセシリアと手を離すと。

「あ………」

名残惜しそうに離れた手を見るセシリア。

「じゃあ、またな！」

そう言うと一夏はISを停止させ、一夏からいちか君になった。

「一夏！」

いちか君になったその時箒達 came。

「箒お姉ちゃん〜」

箒の所に走って行くいちか君。

「あ、ああ。いちかお疲れ様。 (もう一夏からいちか君になったの

か。一夏ともつと話をしたかったのに…」

「いちか君お疲れ様です」

真耶が労いの言葉をかけてくれる。

「よくがんばったな…（ワザと負けた理由を聞こうと思ったのだがな。まあ、大体の理由は想像がつくがな）」

そう思いながらいちか君の頭を撫でる千冬。それにしても千冬はいちか君には甘いようだ。

「えっと、ISは待機状態になってますけど、織斑君が呼び出せばすぐに展開できます。ただし、規則があるのでちゃんと読んでおいてくださいね」

資料を渡す真耶。少しISの事を説明するとISは一度フィッティングしたら、ずっと操縦者の体にアクセサリーの形状で待機している。セシリアは左耳のイヤークラス。いちか君は何故か…ヒマワリを模った名札だった。平仮名で『いちか』と書かれている。裏面には迷子になった時の連絡先まで書かれている。白式の親切設計なのか？というかこれは誰かに盗まれるような気がする。

「今日はおしまいだ。帰って休め」

「はい…」

何処か呆けているセシリア。

「「（一夏と何かあったな…）」」

女の感でセシリアの様子が変な事に気がつく筈と千冬。

「バイバイ〜セシリアお姉ちゃん〜」

手を振るいちか君。

「はい！さよならですわ」

急に笑顔で手を振り自分のピットに帰るセシリア。

「「（絶対に何かがあった！）」」

確信する二人だった。

寮への帰り道、いちか君と箒は手を繋いで歩いていた。

「いちか」

「何、箒お姉ちゃん」

「その、なんだ…負けて悔しいか？」

「……………」

無言になるいちか君。ワザと負けましたとは言えないようだ。

「うん。悔しいよ…」

「そ、そうか…」

箒は一夏がワザと負けたのは気がついてないようだ。

「あ、明日からは、あれだな。あ、ISの訓練もいれないといけ  
いな」

言葉を続ける箒。どうもよそよそしい。そわそわしているようにか…

「箒お姉ちゃんはISの操縦を教えてくださいの？」

「む、無理にとは言わないぞ。なんなら、千冬さんに教えてもらっ  
たほうがいいのではないか？」

「ん〜千冬お姉ちゃんは嫌がると思うよ。えこひいきと思われちゃ  
うし」

多分いちか君が頼めば千冬は迷うことなく了承すると思う。どんな  
に反対されても…

「そ、それなら先輩にでも教えて…（だ、ダメだ！そんな事をすれ  
ば、い、いちかが先輩達の毒牙に！）」

変な妄想をする箒。

「箒お姉ちゃんが嫌だったら…」



「い、嫌とは言っていない！」

びっくりするいちか君。

「そ、その…い、いちかは私に教えて欲しいのだな…」

「うん！」

笑顔で頷くいちか君。

「そ、そうか…そうかそうか。なるほどな。ふふっ、仕方がないな」

急に嬉しそうにする篤。よほど嬉しいのかしきりに髪をいじっている。長いポニーテールの一部を指先で絡めてはほどくを繰り返している。

「よし、ではこの私が教えてやろう。特別にな」

「うん。ありがとう篤お姉ちゃん」

「では、明日から必ず放課後は空けておくのだぞ。いいな？」

「はい！」

手を上げて返事をするいちか君。

「（放課後もいちかと一緒にいられる。それにISを機動させるから本来の一夏とも話せる。一度に二度楽しめる…ハッ！イカン、私は何を考えて…でも、久しぶりに会った一夏。かつこよくなっていたな…小さいいちかとかつこよくなつた一夏。イイ？）」

算の脳内では算を真中にいちか君と一夏とで握手をしてお花畑をスキップしていた。どうやら逝っちゃたようだ。あく涎が出ている。そんな算を見ていちか君は…

「算お姉ちゃん怖い。どうしちゃたんだろっ…」

算の逝っちゃっているモード？を理解できず何時もどつり怯えるいちか君だった。

サアアアアア…

シャワーノズルから熱めのお湯が噴き出す。水滴は肌に当たっては弾け、またボディラインをなぞるように流れいく。白人にしては珍しく均整の取れた体と、そこから生まれる流線美はちよつとしたセシリアの自慢だ。しゅつと伸びた脚は艶めかしくもスタイリッシュで、そこいらのアイドルには引けを取らないどころか勝っているくらいである。シャワーを浴びながら、セシリアは物思いに耽っていた。

「（今日の試合…）」

いつだって勝利への確信と向上への欲求を抱き続けていたセシリアにとって、この困惑はひどく落ち着かないものだった。

「（ワザと負けた相手なのに…）」

腑に落ちない。なんだかすっきりしない。

「（織斑、一夏…）」

あの男子の事を思い出す。あの、強い意志の宿った瞳を。他者に媚びる事のない眼差し。それは、不意にセシリアの父親を逆連想させた。

「（父は、母の顔色ばかりうかがう人だった…）」

名家に婿入りした父。母には多くの引け目を感じていた。幼少の頃からそんな父親を見て『将来は情けない男とは結婚しない』という思いを幼いながらに抱かずにはいらなかった。母は強い人だったけれど憧れた人だった。でも両親はもういない。三年前事故で他界した。いつも別々で過ごしていた両親が、どうしてその日に限って一緒にいたのかは未だにわからない。そして手元には莫大な遺産が残った。それを金の亡者から守るためあらゆる勉強をした。その一環で受けたIS適正テストでA+が出た。そのままブルー・ティアーズの第一次運用試験者に選抜され、データ収集と戦闘経験値を得るため日本に来た。

そして出会ってしまった。織斑一夏と。理想の、強い瞳をした男と。

「織斑、一夏…」

その名前を口にしてみる。不思議と、胸が熱くなるのが自分でもわかった。どうしようもなくドキドキする。

「……………」

熱いのに甘く、切ないのに嬉しい。なんだろうこの気持ちは。意識

すると途端に胸をいっぱいにする、この感情の奔流は。

知りたい…その向こう側にあるものを。

知りたい。一夏の、ことを。

そしていちか君…

最初は何とも思わなかったが今は…母性本能を擽るといっか、あの軟肌に触れてみたいといっか。

「（私色に染めてみたいですわね…）」

ジュルリ…という音が聞こえそうな感じがする。頬は緩み目は…逝っているようだ。

「（明日からが楽しみですわね…）」

キラーン！とセシリアの目が光った。

ゾク！いちか君は身震いをした。

「どうした、いちか？」

いちか君の様子が変なので心配する筈。

「わからないけど、凄く怖い感じがした…」

「？」

ニュータイプに覚醒しつつある、いちか君だった。

だいごわめ〜(後書き)

次回は鈴音を登場させます。いちか君とどう絡ませるか…  
とりあえず逝っちゃうとは思いますが。  
では〜

だいろくわめ〜(前書き)

やっと鈴の登場です。鈴も逝っちゃう予定です。ではよろしくお願  
いします！



だいろくわめ〜

翌日、朝のSHR。あり得ないことが起きていた。

「一年一組の代表は織斑いちか君に決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね!」

真耶は嬉々として喋っている。そしてクラスの女子も大いに盛り上がっている。

「先生、質問です」

「はい、織斑君」

「僕は昨日の試合に負けたけど、なんでクラス代表になってるの?」

「それは…」

「それはわたくしが辞退したからですわ!」

がたんと立ち上がり、早速腰に手を当てるポーズ。

「まあ、勝負事態は納得がいきませんでした。が、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして」

事実、子供に怒っていたセシリア。

「いちか君。にクラス代表を譲ることにしましたわ。やはりIS操縦には実戦が糧。クラス代表となれば戦いには事欠きませんもの」

「いやあ、セシリアもわかってるね！」

「そうだよねー。せつかく世界で唯一の男子がいるんだから、同じクラスになった以上持ち上げないとね！」

「私達は貴重な経験が積める。他のクラスの子に情報が売れる。一粒で二度おいしいね、いちか君は」

「色々な衣装を着たいちか君を撮影させてくれれば、そしてその写真を売れば…確実に売れる！」

クラスメイトを売る女子達。

「そ、それですわね」

コホンと咳払いをして、あごに手を当てるセシリア。

「わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば、それはみるみるうちに成長を遂げて…」

バン！机を叩く音が響く。立ち上がったのは箒だった。

「あいにくだが、いちかの教官は足りている。私が、直接頼まれたからな」

『私が』を特別強調した箒は、異様に殺気立っている瞳でセシリアを睨む。しかし、先週は怯んだセシリアも、今日は違った。正面から受け止めて、視線を返している。それどころかちよっと誇らしげだ。

「あら、あなたはISランクCの篠ノ之さん。Aのわたくしに何かご用かしら（やはり、障害になるのは彼女ですわね）」

「ら、ランクは関係ない！頼まれたのは私だ。い、いちかがどうし

てもと懇願するからだ（折角、いちかと二人きりなる機会が増えたのに邪魔をされてたまるものか！）」

「え、箒お姉ちゃんってランクCなの？」

「だからランクは関係ないと言っている！」

ちなみにいちか君はBらしい。

「座れ、馬鹿ども！」

すたすたと歩いて行ってセシリアと箒の頭を出席簿で叩く千冬。さすがは第一回世界大会の覇者、凄味が違う。

「お前達のランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣をつけようとするな（本当は私が手取り足とり教えたいのに…）」

何を教える気でしょうか？千冬さんは…

「クラス代表は織斑いちか。異存はないな」

はいとクラス全員一丸となって返事をした。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット。試しに飛んでみせる」

四月も下旬、遅咲きの桜の花びらがちようど全部なくなった頃。いちか君は今日もこうして千冬の授業を真面目に受けていた。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

そう言われていちか君は。いちか。と書かれた名札に指先だけ触れて、ISが展開されるイメージをする、

「(来て、白式)」

そう心の中でつぶやく。刹那、胸元の名札から全身に薄い膜が広がっていくのがわかる。約0.7秒ほどの展開時間。いちか君の体から光の粒子が解放されるように溢れて、そして再集結するようにまとまり、IS本体として形成される。それと同時にいちか君から一夏に姿も変わった。

「きゃ〜織斑君よ!」

「可愛いのもいいけどかっこいいのも…」

「誰かデジカメか何か持ってない！」

「馬鹿ども静かにしろ！織斑、オルコット。二人とも飛べ（やはりこちらの一夏もイイ！）」

そう言われてセシリアの行動は速く、一気に急上昇して遙か頭上で静止する。

「どうした？お前も行け」

「あ、ああ」

一夏は空を見上げ…消えた。

「えっ…」

「お、織斑君が消えた…」

「ど、何処に行ったの…」

急に一夏の姿が消えたので驚く女子達。

「まずまずだな…」

千冬は空を見上げてそう言った。

「えっ…」

女子達は空を見上げるとセシリアの隣に一夏はいた。

「何時の間に…」

あまりの一夏の速さに一同驚いていた。

「さすがですわね。一夏さん」

楽しそうにほほ笑むセシリア。その表情は嫌味でも皮肉でもなく、本当に楽しいという笑顔だ。あの試合以降、何かといちか君と一夏

のコーチを買って出てくる。一夏も（どういった心境の変化だろうか？友達として認めてくれたからか？）などと思っている。一夏のIS操縦の技術は相当なものだが知識も浅く経験も少ないのでセシリアの指導はありがたかった。

「一夏さん。よろしければまた放課後に指導してさしあげますわ。その時は二人きりで…」

「一夏！いつまでそんなところにいる。早く降りてこい！」

いきなり通信回線から怒鳴り声が響く。見ると、遠くの地上では真耶がインカムを筈に奪われておたおたしていた。

「織斑、オルコット、急下降と完全停止をやって見せる。目標は地表から十センチだ」

「了解です。では一夏さん、お先に」

言って、すぐさまセシリアは地上に向かう。

「うまいもんだなあ」



どつやら完全停止を難なくクリア したらしい。

「よし、俺も行くか…」

一夏は意識を集中させ、背中の翼状の突起からロケットファイヤーが噴出しているイメージをして、一気に地へ。そして…

一夏は砂埃が舞うことなく地上に降り立っていた。

「やっぱり消えたよね…」

「瞬間移動かな？」

「さすがにそれは…」

「ああ、あれはですねあまりの速さにみなさんが視認出来ないだけで…」

真耶が女子達に一夏の消える理由を話している。

「（別に特別な事をしてるつもりはないけどな…自然にできるん

だよな」

と考えていると千冬が一夏の前に立った。

「織斑、武装を展開しろ」

「はい」

一夏は右腕を突きだし、その腕を左手で握る。

。物体を斬る、刃のイメージ。鋭く、堅固な物体。強い、武器…。

「（来い…！）」

集中力が極限に達した時、手のひらから光が放出される。そしてそれが像を結び、形として成立する。光が完全に収まった頃には、一夏の手には《雪片式型》が握られていた。

「まだ遅いな。0.5秒で出せるようになれ（甘やかしたいが、厳しくせねば…）」

「はい」

「次、セシリア。武装を展開しろ」

「はい」

左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突きだす。一瞬で狙撃銃が握られていた。

「さすがだな、代表候補生。ただし、そのポーズはやめる。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ（もし、一夏に当たったりしたら…）」

「で、ですが…」

「直せ。いいな」

「…はい」

「次は近接用の武装を展開しろ」

「えっ、は、はい」

銃器を光の粒子に変換、そして新たに近接用の武器を展開する。しかし光はなかなか像を結ばず、くるくると空中をさまよう。

「くっ…」

「まだか？」

「す、すぐです。ああ、もっつ！《インターセプター》！」

武器の名前を半ばヤケクソ気味に叫ぶ。それによりイメージはまつまり、光は武器として構成される。

「…何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらおうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入ら…」

「織斑との対戦で初心者に簡単に懐を許していたように見えたが？」

「あ、あれは、その、予想外というか…」

「ごにょごにょとまごついて、セシリアの言葉は歯切れが悪い。セシリアはキツと一夏を睨むと…」

「どうしたのセシリアお姉ちゃん？」

いつの間にかISを解除して一夏からいちか君になっていた。

「ず、ズルイですわ！」

何がズルイのかいちか君には何も言えず我慢するセシリア。

「時間だな。今日の授業はここまでだ（うまくかわす事を覚えたな、一夏）」

こんな感じで今日の授業が終わった。

「ふっん、ここがそうなんだ…」

夜。IS学園の正面ゲート前に、小柄な体に不釣り合いなポストン

バックを持った少女が立っていた。

「えーと受付ってどこにあるんだっけ」

上着のポケットから切れの紙を取り出す。くしゃくしゃになったそれは、少女の大雑把な性格と活発さを非常によく表していた。

「本校一階総合事務受付…って、だからそれどこにあんのよ」

文句を言っても、紙は返事をしない。少女は多少のイライラと一緒に紙を上着のポケットにねじ込む。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

ぶつくさ言いながらも、その足はとにかく動いている。思考よりも行動。そういう少女なのだ。良く言えば『実践主義』、悪く言えば『よく考えてない』である。

「(っ)たく、出迎えないとは聞いていたけど、ちょっと不親切すぎるんじゃない？政府の連中にしたって、異国に十五歳を放り込むとか、なんか思うところないわけ？」

少女は、日本人に似ているがよく見ると違う。その鋭角的でありながらもどこか艶やかさを感じさせる瞳は、中国人のそれだった。

「（誰かいないかな。生徒とか、先生とか、案内できそうな人）」

学園内の敷地をわからないなりに歩きながら、きよろきよろと人影を探す。とはいえ時間は八時過ぎ、どの校舎も灯りが落ちていいる。当然生徒は寮にいる時間だった。

「（空でも飛んで探したいけど、手続きも終わってないのにISを機動させたら外交問題にも発展するかもしれないし。そういう事だけはやめてくれって政府高官が情けない顔して言ってたしね）」

ふっふーんと少女は笑った。

「（自分の倍以上も歳のある大人がへこへここと頭を下げるのは、ちよつと気分がいいな。昔から『歳をとっているだけで偉そうにしている大人』が嫌いだったからね。今の世の中は居心地がいいわね）」

男の腕力は見戯、女のISこそ正義。今の世の流れはそうなっている。

「『男っていうだけで偉そうにしている子供』って大嫌いだったな」

物想いに耽る少女。

「（でもアイツは違ったなあ。私が日本に帰ってくる最大の理由になっっている思いで…元氣かな、アイツ。まあ、元氣だろうけど。元氣でない姿を見た事がなかったかな」

「なん…だ…だっ…」

ふと、声が聞こえる。視線をやると、女子がIS訓練施設から出てくるようだった。どの国でもIS関係の施設は似たような形をしているから、すぐにそうだとわかる。

「（ちよつどいいや。場所聞こつと）」

声をかけようとして、少女は小走りにアリーナ・ゲートへと向かう。

「うまく出来ていたかな？ 篝お姉ちゃん」

「（えっ、何で子供がここにいるの？）」



少女は声が聞こえた所に行くと一人の少女と小さな子供が一緒に歩いていた。

「ああ、いちか。イメージを掴むのが上手くなったな。私も教えがいがある」

箒はそう言っていていちか君の頭を撫でた。

「へへ…」

嬉しそうに微笑むいちか君。

「……………」

二人は話しながら何処かへ行ってしまった。状況がわからず唖然としてしまい声をかける機会を無くした少女だった。それからすぐに総合事務受付は見つかった。アリーナの後ろにあるのが、本校舎だったからだ。

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。IS学園へようこそ、鳳鈴音さん」

愛想のいい事務員の言葉もどこか遠くにあって意識に届かない。

「（あの子、何処かで見た事がある気がする…何処だったかな？それに一夏って言ってたような…）」

いちか君のことが気になってしかたがない様子。

「織斑一夏って、何組ですか？（まっ、気にしても仕方がないか。それより…）」

「ああ、噂の子？一組よ。凰さんは二組だから、お隣さんね。そうそう、あの子一組のクラス代表になったんですって。やっぱり織斑先生の弟さんなだけはあるわね」

「二組のクラス代表って、もう決まっていますか？」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？ええと…聞いてどしどしするの？」

鈴音の態度にすこしおかしなところを感じたのか、事務員はすこし戸惑ったように聞き返す。

「お願いしようかと思って。代表、あたしに譲ってって……」

にっこりした笑顔でいう鈴音だった。

「というわけでっ！いちか君クラス代表決定おめでとう！」

「おめでとう〜！」

パン、パンパン。クラッカーが乱射される。今は夕食後の自由時間。場所は寮の食堂、一組のメンバーは全員揃っていた。各自飲み物を手にやいのやいのと盛り上がっている。壁には『織斑いちか君クラス代表就任パーティー』と書いた紙がかけてある。

「いや〜これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよね〜。同じクラスになれて」

さっきから相づちを打っている女子は二組のような気がする。明らかに三十名以上いると思われる。

「人気者だな、いちか」

「そうなの？ 箒お姉ちゃん」

「ふん」

箒は鼻を鳴らしてお茶を飲む。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑いちか君に特別インタビューをしてみました」

オーと一同盛り上がる。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名刺」

「ではではずばり織斑いちか君。クラス代表になった感想をどうぞ

「！」

ボイスレコーダーをずっといちか君に向けて無邪気な子供のよ  
うに瞳を輝かせている。

「え、えっと…」

返答に困るいちか君。

「み、みんなの期待に応えられるようにがんばります」

「え、もっといいコメントちょうだいよ、僕の魅力で学園の女子全  
員にフラグを立てますとか」

「？」

「小さいいちか君には無理かな。適当にねつ造しておくか」

関係ないコメントとねつ造してそれでいいのか？新聞部。

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方がないですわね」

とかなんとか言いつつ満更でもないセシリア。

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したか」といって、それはつまり…」

「ああ、長そつだからいいや。写真だけちょうだい」

「さ、最後まで聞きなさい」

「いいよ、適当にねつ造しておくから。よし、織斑いちか君いや織斑一夏君に惚れたからってことにしよう」

「なつ、な、ななつ…?」

ポツと赤くなるセシリア。

「セシリアお姉ちゃんどうしたの?」

首を傾げてセシリアに質問するいちか君。

「な、何でもありませんわ」

「はいはい、とりあえず二人並んでね。写真を撮るから」

「えっ？」

意外そうなセシリアの声。しかし喜色を含んで弾んでいるようにも聞こえる。

「注目の専用機持ちだからね。ツーショットもらつよ。握手でも…  
うーんいちか君が小さいからバランスが悪いな」

顎に手を当てて考える黛さん。

「そうだ！セシリアちゃん。いちか君を膝の上に座らせてあげて。  
そのツーショットを撮るから」

「え？ひ、膝のう、上ですか？」

「そ。膝の上」

「し、仕方ありませんわね」

赤くなりながら、でも嬉しそうにいちか君を自分の膝の上に座らせるセシリア。

「あ、あの撮った写真は当然いただけますわよね？」

「そりゃもちろん」

「でしたら今すぐ着替えて…」

「時間がかかるからダメ。はい、撮るよ」

「はい」

「元気に返事をするいちか君。セシリアは何か顔が緩んでいる。」



「（ああ…いちか君がわたくしの膝の上に。可愛い小動物を彷彿させるような感じ。ああ…）」

セシリアも箒と同様に逝っちゃう傾向があるようだ。

「せ、セシリアちゃん…ちょっと顔が怖いんだけど…」

「はっ！すいません…（わたくしとしたことが…）」

普通のスマイル？になるセシリア。

「今度こそ撮るよ〜」

パシャッとデジカメのシャッターが切られる。

「な、なんで全員入っているんですの!」

恐るべき行動力をもって、一組のメンバーが撮影の瞬間にいちか君とセシリアの周りに集結していた。

「あ、あなたたちねえ!」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「私は一夏君と撮りたい…」

口々にセシリアを丸め込むようなことを言っている。

「う、ぐ…」

苦虫かみつぶしたような顔をしているセシリアを、クラスメイトはにやにやとした顔で眺めていた。そしてパーティーは十時過ぎまで続いた。

「さあ、いちか君。今日はわたくしと一緒に寝ましようか」

いちか君の手を取って食堂から出ようとするセシリア。

「待て！」

それを引きとめる箒。

「いちかは私と同じ部屋で寝るんだ。何故お前と一緒に寝なければならぬ！」

「わたくしはただ添い寝をしてさしあげようと思ひまして」

「そんな事は必要はない！（それは私だけの特権だ！）」

箒とセシリアが言い合ひをしていると…

「箒お姉ちゃん、セシリアお姉ちゃん。二人ともケンカしてるの？」

涙目で聞いてくるいちか君。二人に落雷が落ちた。

「そ、そんな事はないぞ。なあ、オルコット（か、可愛い！）」

「え、ええ。そうですね。ねえ篠ノ之さん（や、やはりお持ち帰

りしたいですわ！」

二人ともどこかの国お偉いさんが条約などを結んだ時に、撮られる握手の状態になる。しかし二人とも顔は逝っていた…

「そうなんだ〜（何だろう。怖い人が二人になっちゃたよ…）」

笑顔になるいちか君。でも心では怯えているようだ。

「（ほっ）」

いちか君が笑顔になり安心する二人。結局セシリアと寝るといことはうやむやになりいちか君は自分の部屋で寝た。

「いちか君。おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

朝、いちか君が席に着くなりクラスメイトが話しかけてきた。

「転校生ですか？知らないです」

今はまだ四月。入学ではなく転入というのは変だろう。

「何でも中国の代表候補生なんだってさ」

「そうなんですか」

代表候補生といえば…

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

とセシリア。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろうか？騒ぐほど事でもあるまい」

と篤。

「どんな人なんだろう？」

「む…気になるのか？」

「うん。篝お姉ちゃん」

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そうですね。いちか君。クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう。専用機を持っている私達だけで」

『だけ』を強調するセシリア。

「と、とにかくがんばります！」

「がんばるだけでは困りますわ。いちか君、一夏さんには勝っていただきますと！」

「そつだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「いちか君が勝つとクラスみんなが幸せだよ！」

セシリア、篝、クラスメイトと口々に応援？をしてくれる。そんな話をしているとあつという間にいちか君の周りは女子で埋め尽くされた。

「いちか君、がんばってね！」

「フリーパスのためにもね！」

「出来れば戦闘時間は長めにね。撮って販売するから」

「今のところ専用機を持っているクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

と話しているところ...

「その情報、古いよ」

教室の入り口からふと声が聞こえた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝はできないから」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていたのは...

「鈴…鈴お姉ちゃん！」

「そうよ。中国だい…ってあんたは？」

「鈴お姉ちゃん」

そう言っつて鈴音の脚に抱きつくいちか君。

「え、ええと…」

戸惑う鈴。

「え、えつとあんたは誰？」

「え…」

急に涙目になるいちか君。

「鈴お姉ちゃん。僕の事忘れちゃったの…」



凄まじい落雷が鈴に落ちたような気がする。あ…ちよっと顔が緩んでいる。

「（な、何、この可愛い生きものは？…ってこの子あの時見た子よね。そう、どこかで見た覚えが…そ、そうよ！一夏に似ているのよ）」

「鈴お姉ちゃん…」

「あ、あんた。な、名前は？」

「え…僕は織斑い…」

鈴音が急に真っ白になった。某ボクサーのよう一瞬で真っ白になるまで燃え尽きたようだ。

「（まさかまさかまさかまさかまさかまさかまさかまさかまさかまさかまさかまさかまさかまさか…い、一夏の子供じゃ…）」

今度はふるえだす鈴。

「鈴お姉ちゃん、大丈夫？」

鈴の異変を心配するいちか君。

「あんた、一夏の子供じゃ…」

「そうだ」

鈴の後ろから声が聞こえた。

「ち、千冬さん！」

「織斑先生と呼べ。それからその子は私と一夏との間に生まれた…」

「だから僕は織斑いちかだよ。鈴お姉ちゃん」

千冬が何か言いきる前にいちか君が自分の名前を言った。

「え？」

いちか君と千冬を交互に見る鈴。

「に、人間は時には冗談の一つも言えんな…」

誤魔化そうとする千冬。

「真顔で言ってますでした？」

質問する鈴。

「うるさい」

出席簿で鈴の頭を叩く千冬。

「詳しい事は後で話してやるから教室に戻れ」

「わかりました…」

千冬には勝てない鈴。

「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！」

「うん！またあとでね。鈴お姉ちゃん」

笑顔で手を振るいちか君。

「うっ！（可愛い。何？あの可愛さは？）」

「さっさと戻れ（私のいちかに、やはり手を手を出す気が…）」

「は、はいっ！」

顔を緩ませながら出て行く鈴だった。

「い、いちか！先っきのは…」

「い、いちか君。今のは…」

箒やセシリア、クラスメイトが質問しようとしたが千冬が出席簿でそれぞれの頭を叩きさせなかった。そして今日も一日EISの訓練と学習が始まる。



だいろくわめ〜(後書き)

次回は鈴音との約束ですが、ちょっと変化させるつもりです。五反田も少しだけ登場させようと思ってます。おもしろくなるようにがんばりますので次回もよろしくお願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7769y/>

---

IS いちか君と一夏のIS学園生活

2011年12月16日00時49分発行